

## 陶人形に託す

まだあたたかさの残っている窯の蓋を、そうっと開ける時、待ちかねたように所せましと並んでいる人形達が、私に話しかけて来ます。喜色満面で口笛の聞えて来そうな子供達や、なぜかふくれっ面の子供達等、私は改めて目をみはるのです。一塊の土くれから人形ひとがたを作り出し、慎重にいのちを吹きこんで行くのです。下の子もようやく高校生になった現在、母親だから子供の表情が豊かなのではないかとよく云われることがあります。誰から見ても、可愛さ、愛くるしさを感じさせる人形



### 可部美智子

は、芸術(Art)のセクションに於いては、全く低次元のもので、怒り、悲しみ、苦しみ、悩み、うらみを表現し、その迫力を訴えることの方が、より芸術的だとされがちではないでしょうか。人間本来の美を追求し生きることの喜悦、育むことの幸福として愛の心を、人形の姿をかりて訴え、語りかけるのは、私の自己表現の手段の一つといえましょう。

私たちは古い文献から「やきもの」の作られた背景を知ることが出来ます。古代中国に於ては、政治にかかせ

ない祭祀の道具や器は、青銅や土器でありました。時代が下ると共に青銅や鉄の器が影をひそめ、土器はうわぐすりをかけて、高温で焼く陶器へと移行して行くのです。最近中国で発掘されつつある王侯貴族の墳墓から出る陶俑（陶器の人形）は、副葬品として有名です。

昨春中国を訪問し、各地の美術館、博物院などを見学し、俑を見て来ましたが、何千年もの歳月を経たとはいえない感覚の新鮮さ、生き生きとした表情、姿態は現代人をも魅了してしまふものがあります。私も二三年前から俑にひかれ、暗い地下から明るい現代社会に踊り出させることが出来たらと美術館に出品したり、画廊へ出したりして発表しました。陶俑即ち陶人形も陶芸の一分野であり、私の作っている壺や花生、茶器などと同じように、普段の研究や修練を要します。

手法は彫ったり、けづったり、土をつけたりと彫塑的なものと、手びねりで仕上げて行くものと、二種類あるのです。出来上るまでの「工程」の道のりは遠いのです。土の塊を何百回と練り、成形し、乾燥し、素焼し、施釉（くすりかけ）し、窯詰めをし、徐々に温度を上げて、千

二百度余りの高温で、二十四時間かけて焼成します。暑い日にも、寒い日にも、精根こめて作る苦しみ、よろこび全てが凝集された、はりつめた気持で、窯出しの日はのぞみます。手のひらに感じる「土」のあたたかさ、「土」の親しさを少しでも、多くの方達に分かちあえる事が出来たらと考えております。

「土」は生きものなのです。「土」は広義では、地球の全ての生きものの生命の根源であり、又やがては帰るべき所でもあります。そんなエネルギーを秘めながら、私の手の中の「土」は、私の心にコンタクトをとるのです。炎の中でじっと耐え、新しい生命の灯をとますのです。

「土」という素材を使って、陶彫という手段によって、私はいろいろな子供達を作ります。人々の心に幼き日の郷愁をさそい、なつかしい母の子守唄がともすると聞え、暗闇にきらめく灯にはっとするような気持を起させ、このせちがらい、とげとげした、醜い社会の一隅にあって香しくと祈る、私の心を少しでも伝えてくれたらと念じつつ、今日も「土」に向う私なのです。

（陶芸家）